平成22年度教育研究調査事業
「活用」を意識した授業改善と評価の在り方に関する研究　報告書　No. 3

言語活動を通して読解力を高める指導

－高等学校１年国語科『伊勢物語』「芥川」の実践を通して－

愛知県立常滑高等学校　教諭　　林　直紀

１　はじめに

平成20年１月の中央教育審議会の答申における国語科の改善の基本方針に基づいて改訂された高等学校学習指導要領の国語の改善点のうち，特に重要なものは次の２点である。

・言語活動を通して指導事項を指導することの重視
・古典を学ぶ意義を認識させ，古典に対する興味・関心を広げる指導の改善

言語活動の充実が示されたことをきっかけにして,改めて生徒の活動を軸に授業を振り返ってみた。すると，一時間の授業過程の中で，生徒は発問に対して答える場面がほとんどであった。実際に生徒が主体的に発言をしたり，教室に議論のテーマを投げ掛けたりする場面はなく，授業者が主体となって授業を展開する様々な工夫をしなければならない。とりわけ古典の授業は説明的なものとなる傾向が強く，文法と解釈中心のいわゆる訓詁注釈型授業ばかりでは言語活動の充実は実現しがたいと言える。

古典の授業改善は日ごろから心掛けているところだが，今回はそれを「言語活動」という面から試みた。意図的に組み込んだ「言語活動」によって，これまでに習得した力を総合的に出現させることができると考えられる。これは高等学校国語科における「活用」の一つの在り方を示していると考える。

１　単元について

(1)　生徒の実態

２学期に入り，漢文の入門教材を終えた生徒は再び古文の教材を学習する。いよいよ古典の学習も文法，とりわけ助動詞を強く意識した内容となった。本格的な古典学習の開始である。予習の段階では分からないことも多く，中には予習そのものをあきらめてしまう生徒も出てくる。そんな生徒の状況とは関係なく，むしろ反比例するかのように，文法事項をはじめ，学習すべき事項は増加する。しかし，せっかくの基礎知識もそれを生かす場がなければ意味をなさない。生徒がもっている力を使って能動的に活動できる授業を仕掛ける必要がある。授業者からの一方的な説明が増えるほど，古典の授業ひいては古典そのものへの興味を失っていく生徒もいる。

(2)　単元観と教材の魅力

本単元『伊勢物語』は平安朝歌物語の代表作品である。古文の基礎知識を学び,『竹取物語』を学習した生徒に，一層古典世界への関心を深めさせ，次年度以降学んでいく『源氏物語』などの本格的

な作り物語の学習へつなげたいと考える。本校で使用する国語総合の教科書には第六段「芥川」，第九段「東下り」，第二十三段「筒井筒」の３編が収録されている。本実践では「芥川」（**資料１**）を扱った。

「芥川」は「鬼一口」ともいわれるものである。男がやっとのことで盗み出した女を鬼に食われて悲嘆に暮れる話である。物語らしい超現実的な世界が描かれている話であるが，女を盗んで逃げる男の切迫した心情や，女を失った男の悲痛な思い，男に同行する女の心情など読み深めたい点は多い。

資料１　伊勢物語　第六段「芥川」（後段ありテキスト）

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籙を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼、はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けども、かひなし。

白玉か何ぞと人の問ひしとき
露と答へて消えなましものを

これは、１二条の后の、２いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、３かたちのいとめでたくおはしましければ、盗みて負ひて出でたりけるを、４御せうと堀河の大臣、５太郎国経の大納言、まだ６下﨟にて内裏へ参りたまふに、いみじく泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返したまうてけり。それを、かく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、后の７ただにおはしけるときとや。

注
１　藤原長良のむすめ、高子。清和天皇の后
２　藤原良房のむすめ、明子。良房は長良の弟である。
３　顔かたち。容貌。
４　二条の后の兄、藤原基経。長良の三男で良房の養子になった。
５　長良の長男、藤原国経。
６　官位の低い者
７　「ただ」は「ただ人」のことで、帝や皇族に対して、臣下の身分の人を指す。

伊勢物語　第六段「芥川」（現代語訳）

昔一人の男がいた。手に入れることができそうにない女を、何年にもわたって求婚し続けていたのだが、やっとのことで盗み出して、とても暗い夜に逃げてきた。芥川という川を女を連れて行ったところ、草の上に降りていた露を見て女は「あれは何。」と男に尋ねた。道のりは遠く、夜も更けてしまったので、鬼のいるところとも知らずに、雷までもとてもひどく鳴り、雨も激しく降ったので、荒れてがらんとした蔵に女を奥の方に押し入れて、男は弓や胡籙を背負って戸口に座る。早く夜も明けてほしいと思いながら腰を下ろしていたのだが、鬼がたちまち一口で女を食べてしまった。女は「あぁっ」と言ったのだが、雷の鳴る騒がしい音のために、聞くことができなかった。次第に夜も明けていくので、見ると、連れてきた女もいない。足ずりをして泣いたけれども、どうにもならない。

白玉か何ぞと人の問ひしとき
露と答へて消えなましものを

これは、二条の后　高子が、いとこの女御の御もとにお仕えするようなかたちで住んでいらっしゃったが、后は顔かたちが大変な美女でいらしたので、男が盗み出し、背負って逃げ出したところ、后の兄の堀河大臣基経、ご長男の国経大納言が、まだ位も低かったころ、参内なさる時、ひどく泣く人がいるのを聞きつけて、男が連れて行こうとするのを引き留め、后をお取り返しになったのである。それをこのように鬼といったのだ。后がまだたいそう若くて、入内などなさる前の普通の身分の人であった時のことだとかいうことである。

本校で使用している教科書には，第六段の全文は記載されていない。「白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを」の和歌以降の本文（以下「後段」と記す）は記載されていないのである。和歌までの本文（以下「前段」と記す）は，まさに超現実的な物語世界である。前段の読みからは次のような点が浮かび上がってくる。

・男は何年も求婚し，許されないので女を盗み出した。一途な男の思いがうかがえる。
・女は露を見て，男に「あれは何」と問うが，男は答えない。明示はされていないが，女は男を

信頼し，対話を求めたことがうかがえる。一方男は先を急ぐあまり女の質問を黙殺してしまう。わずかな心のすれ違いが和歌に現れる男の後悔へとつながる。
・雨宿りをした蔵の中で，女は鬼に食われて死んでしまう。

一方，後段を踏まえた読みからは次のような点が浮かび上がってくる。

・男が盗み出したのは後の二条の后，高子であり，顔かたちが大変な美女だったから盗み出した。
・男は女を背負って逃げている。
・女は道行きの途中で泣いており，男と同行を嫌がったり怖がったりしている。「あれは何」の質問も夜道に光るものへの恐怖から発せられ，男が答えないのも，追手が藤原氏であり，男自身も恐怖しているからと考えられる。
・女は基経，国経によって保護されたが，男は，女は鬼に食われたということにした。

前段までの物語と後段のある物語では，異なった姿を見せる。先に述べた，授業で読ませたい「女を盗んで逃げる男の切迫した心情や，女を失った男の悲痛な思い，男に同行する女の心情」について，前段，後段では異なる読みが考えられるのである。

まず，「女を盗んで逃げる男の切迫した心情」については，先を急ぐ気持ちは同じでも，対象が明確になっている後段のある方が恐怖を伴い，具体像を結びやすい。「女を失った男の悲痛な思い」については，この世にいない女を思うか，取り返された悔しさを思うかでは「悲痛な思い」の内容が異なる。「男に同行する女の心情」については，相思相愛の男を信頼して逃げているか，嫌悪や恐怖の情を抱いているかでは「女の心情」は全く異なってくる。

原典には和歌以降の本文があるという点については,多くの授業においても触れられると思われる。もし，後日談的に紹介をするだけであれば，５～10分程度で終わる内容である。だが，ここまで見てきたように違いはかなり大きいものであり，生徒の読みを深めさせるためのテーマたり得るものである。

また，こうした読みは『伊勢物語』を絵画化した作品にも現れてくる。本単元では比較的入手しやすい次のような作品を扱った。

① 「伊勢物語図色紙」伝俵屋宗達筆
② 嵯峨本「伊勢物語」挿絵
③ 奈良絵本「伊勢物語」京都大学附属図書館所蔵
④ 「新釋繪入伊勢物語」絵竹久夢二

教科書の挿絵にもなっている①では，見つめ合う男と女が描かれる。一方，③④のように男と女の見ている方向が異なり，視線が交わらないものもある。この他にも異なる要素を見つけ出し，検討する中で，絵画から得られた情報を基に，本文に立ち向かわせるきっかけとすることが可能である。

今回の実践では，「芥川」を，「和歌以降の本文の有無」という点と「絵画化された『芥川』」という点に着目し，生徒の言語活動につながるように教材化した。

(3) 単元構想

単元の目標を次のように設定し，５時間の計画を立てた。

・古文の叙述に即して内容を的確に読み取り，登場人物の心情に迫らせる。
・読解のために必要な文語の決まりや語句の意味・用法を理解させる。
・表現の仕方を分析し，書き手の意図をとらえさせる。

第１～３時	語句の意味・用法や付属語の働きなどの学習や，現代語訳の確認
第４時（実践１）	和歌以降の本文（後段）の有無による違いを分析・考察し，批評文を書く。
第５時（実践２）	絵画化された「芥川」を比較分析し，批評文を書く。

（4）　活用を意識した場面

この単元では，後段の有無による登場人物の状況，心情の相違を物語本文や絵による表現に即して読み取り，自らの考えを述べる学習活動を展開する。

第４時，第５時の授業では，物語内容や絵にどのような相違があるかを比較し，論述する際に，既習の言語能力（知識・技能）を用いて思考力，判断力，表現力を働かせることを意図した。

資料２　課題を解決する際に用いることを想定した既習の言語能力

	（中学校）第２学年	（中学校）第３学年
A 話すこと・聞くこと	オ　相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること。	エ　話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと。
B 書くこと	イ　自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること。	イ　論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力ある文章を書くこと。
	ウ　事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるようにして、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。	
C 読むこと	ウ　文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。	ウ　文書を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。

平成20年３月告示　中学校学習指導要領　国語

ここでの中学校までの既習の言語能力（知識・技能）として想定したものは**資料２**のとおりである。

作品を読み，考えたことを生徒が生徒自身の言葉で表出する以下の過程を，言語能力を活用する場面と設定して授業に組み込んだ。

① 小集団による検討（**資料３**）
　対象を比較分析し，評価する過程で，自己の分析と他者の分析を共有する際に話す，話し合うという活動が立ち上がる。

② 個人での振り返り
　テーマに基づき，批評文を書く過程で，集団で検討したことを振り返り，自己の読みが確かなものになったり，変容したりする状態が立ち上がる。

資料３　小集団による検討

この①②によって，テキストの読解を個人内活動で収束させるのではなく，鍛えられた読解へと変容させることを意図している。

資料４　４/５時間（本時）

学習段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点と評価の実際
導入 （10分）	前時までの確認 ・「心に残ったこと」や「よくわからなかったこと」の確認 和歌以降の本文を紹介 ・音読と現代語訳の確認	・「鬼」や「女の素性」に着目した生徒がいるか確認する。 ・後段によって，明らかになったこともあれば，矛盾が発生したこともある点に気付かせる。
展開① （５分） 展開② （10分） 展開③ （20分）	本時の学習活動の確認 ・第六段の後段の有無によって内容がどのように変わるかを比較し，和歌以降の本文の要不要についての批評文を書く。 ・既習の「根拠をもって述べる」を確認する。 本文比較 ・小集団による比較検討 　比較した内容はワークシート①に記載する。 ・既習の「対照表にして比較する」を確認する。	・「和歌以降の本文は必要か不要か」を論ずることを明確にする。 ・条件１「根拠をもって述べる」 ・条件２「後段の有無によって，得られたものと失われたものに触れる」 ・内容の比較は現代語訳で行ったとしても，必ず古文の表現を確認することを指示する。 ・必要に応じて全体に助言することを確認し，小集団による学習に入らせる。 ・５分程度生徒を観察し，検討の進め方，対照表を作っているか等をチェックする。 ・比較した内容を表でまとめている班があれば紹介し，なければ助言する。 ・生徒の活動状況に応じて，対照表を作るために助言したり,補助資料を渡したりする。 ★２種類の本文を比較し，得られた情報を選択し，評価につなげているかどうかを生徒の活動の状況やワークシートから評価する。
終結 （５分）	根拠を持った文章の作成 ・「和歌以降の本文は必要か不要か」を論じた批評文を作成する。 　批評文はワークシート②に記載する。 授業の振り返り ・「授業を振り返って」への記入	・批評文にまとめることは課題とする。 ・結論の明示と２つの条件を満たすように記述することを確認する。 ★比較を通じて得られた根拠に基づいて，第六段の内容に関する考えを述べているかどうかを，ワークシート②の記述から評価する。

資料５　５/５時間（本時）

学習段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点と評価の実際
導入 （10分）	前時に見られた読みの確認 伊勢物語絵の紹介	・和歌以降の本文の有無によって「一途な愛の物語」と「略奪の物語」の２種類の読みがあったことを確認する。 ・絵を読みの表れとしてとらえさせる。
展開① （５分） 展開② （15分） 展開③ （15分）	４種類の絵を評価する ・４種類の伊勢物語絵を，男女の相愛度が高い順に並べる。 本時の学習の確認 ・挿絵として最もふさわしいものを選び，その理由を述べる批評文を書くために，４種類の伊勢物語絵と本文とを比較する。 伊勢物語絵と本文の照応 ・小集団による比較検討 ①項目ごとにどの絵が該当するか調べる。 ②項目ごとに根拠を本文に探る。 ③最終判断をする。 読解の結果を文章化する	・一番相愛度が高いとしたものを挙手により確認する。 ・自分が挿絵として選ぶならどの絵を採用するか，本文の読解を踏まえて述べる。 ・相愛度順の並べかえのように無意識的な根拠に基づく評価ではなく，根拠を明確にして評価を行うことを確認する。 ・比較項目は各班で検討する。 ★複数の伊勢物語絵を比較し，それぞれの違いの根拠を本文表現から探しているかどうかを，生徒の活動状況やワークシートから評価する。 ★それぞれの絵の意図をとらえ，読み味わうことを通じて自分の考えを表現しているかどうかを，批評文の記述から評価する。
終結 （５分）	授業の振り返り ・男が女を連れて逃げる場面の絵の違いを読み解くことを通じて，古典の文章の読みを深める学習であったことを振り返る。	・絵の違いは読みの違いであり，それに気付くことも読みの深まりであることを確認する。

３　授業の実際

(1)　実践１（本時）

第４時（**資料４**）は，和歌以降の本文（後段）の有無による違いを分析・考察し，批評文を書かせた。第４時の目標は「和歌以降の本文は必要か，不要かについて，根拠をもって述べること」と設定した。

まずは和歌以降の本文（後段）の有無による違いを比べるよう指示し，５～６人のグループを作り，検討させた。最初は具体的な方法を示さず，話合いに入らせた。生徒は戸惑い，何を話し合うか迷ってしまうグループもあった。

資料６　　本文内容の比較表

項目	和歌以降本文なし	和歌以降本文あり
女の素性	高貴な女性	清和天皇の后の若い頃 女が特定される
女の住まい	自宅か	いとこの女御の所
盗み出した理由	何年も求婚し続けて（許されないから）	美人だったから
逃げ方	連れて逃げた	背負って逃げた
女の様子	記述なし	逃げる途中で泣いている
男女の関係	男は一途に女を愛している 女は男に信頼を寄せていると思われるが、明示されてはいない	略奪者と被害者
女の気持ち	女は男に信頼を寄せていると思われるが、明示されてはいない	嫌がったり怖がったりしている （逃げる途中で泣いているから）
女の質問の理由	見たことのない世界への好奇心	夜道に光るものへの恐怖
男が知らなかったこと	鬼がいる蔵だったこと	女の兄弟が女を取り返しに来ていること
女の結末	鬼が一口に食べた	気づいた兄弟が取り返した
男と女の別れ	死別	生別

続いて，必要に応じて比較したことを表にまとめると分かりやすいことを助言した。実際は授業者が指示する前から表を作っているグループもあり，生徒の中には表にして比較分析を行うこと（**資料６**）が技能として定着している様子が見られた。

このように，生徒それぞれが批評文を書く前段階として，後段の有無によって「芥川」の内容がどのように異なるかを小集団で分析させた。作業を円滑に進めるために，生徒には現代語訳で検討を進めさせ，そこでの比較検討を通じ，自分が価値判断をするための根拠を明確にさせていった。しかし，古典で本格的に比較分析を行う読みの授業は初めてのことであり，生徒からは「いつもと授業のやり方が違ったので，少し手こずった」「かなり久々のグループを作っての授業だったので最初はあまり意見を出すことができなかった」といった感想が聞かれた。

生徒の作成した批評文では，後段を不要とする意見と，必要とする意見が半数ずつに分かれた。その根拠には作業を通じて得られた検討内容が反映されていた。さらに，生徒は文章の構成を意識し，結論を最初に提示する頭括もしくは双括型の文章を書いている。また，批評文として，「反論を想定した論述」「根拠の列挙の仕方を工夫した論述」を意識した生徒もいた。ここで確認しておきたいことは，本時において文章の書き方指導は行っていないということである。授業者の意図したとおり，生徒が自ら考え，言語既習の能力を活用したと言える。

次の批評文は，生徒が文章の読み方の再構築を行ったことをうかがわせるものである。

・歌以降の文章があった方がいい。和歌以降の文章があると，本文の細かいところが変わってくる。男女の関係，表情，細かい設定などが変わってくる。鬼が女を一口で食べてしまう，鬼という表現が和歌以降の文章がある

と，鬼ではなく国経大納言であるとわかります。鬼という表現が，かなり変わってきます。このように，一度読んだあとでもう一度読むことによって，また変わった表現を見つけることができると思う。つまり，読む楽しさを味わうことができます。（生徒Ａ）

・僕は，和歌以降の本文は不要だと思いました。最初に和歌以降を読んだときはすごく現実味のある内容にアレンジされていて面白いと思いました。鬼が女の兄弟にたとえられていたり，女がやはり貴族であったりといろいろなことが明らかになってきたからです。しかし，グループを作り，話し合ってみると，僕の考えは変わりました。相思相愛な男と女，男が女を純粋に思う気持ち，女を鬼に食べられてしまった男の悲しさや空しさ，喪失感が分かりやすく描かれていると思い直したからです。更に和歌で物語をしめることによって男は，この後どうなってしまったのだろう？女の家族は突然いなくなってしまった娘をどう思うのだろう？などと様々なことを思い，感じ，考えさせてくれるからです。（生徒Ｂ）

第４時終了時に書かせた振り返りシートに「『根拠をもって述べる』ことは小学校や中学校で学びましたか」という質問と，「『表にして比較する』ことは小学校や中学校で学びましたか」という質問項目を設けてあった。生徒Ａはどちらの項目にも「覚えていない」と回答している。生徒Ｂは後者に「覚えていない」と回答している。中学校までに学習していたはずの事項に意識の低かった生徒が，既習の言語能力を活用し，さらに自らの読みを再構築した様子が見られる。

他の生徒の感想からも，「グループで考えることによって，自分が思い付かなかったような考えが他の人から出てきて，考えの幅が広がったと思う」「グループで話し合うことによって自分以外の新鮮な意見を聞くことができた。一人だと決まった考えからなかなか離れられないけれど，グループにすることによってそれがなくなり，よかったと思う」といったものが聞かれた。互いの考えのよさを認め合い，自分の考えを広げるための話合いがなされたことが，批評文からだけでなくこうした振り返りからも分かる。

（2） 実践２

第５時（**資料５**）は，絵画化された「芥川」の比較分析をし，批評文を書かせた。前時に確認できた「芥川」の二つの姿「鬼に恋しい人を奪われた悲恋物語」と「兄弟に取り戻される現実的な話」を，もう一度意識させた上で，第５時の目標は「どの絵が本文にふさわしいかについて，根拠をもって述べること」と設定した。この課題に応じて，生徒は絵に表された情報を読み取り（**資料７**），まとめていった。

資料７　伊勢物語絵比較表（生徒用は項目以外空欄）

項目	①	②	③	④
男が女を背負っている	○	○	○	○
（秋の）草（露）が描かれている	○	○	○	○
川（芥川）が描かれている	○	○	○	○
柳の木が描かれている		○	○	○
男が裸足である		○		○
男が沓を履いている	○			
男が草履を履いている			○	
男と女の視線（同じものを見ている）		○		
男と女の視線（見つめ合っている）	○			
男と女の視線（同じものは見ていない）			○	○
進行方向　右から左	○	○		
進行方向　左から右			○	○
すねが見える		○	○	○
月がある			○	
家がある			○	

①～④は３ページ参照

生徒の作成した批評文では，③を選んだ生徒が25名，④が12名，①が６名，②が３名であった。場合分けをして複数の絵を選択した生徒もいたので，総数は生徒在籍数よりも多くなっている。③は描かれた要素が最も多く，情報をよく伝えているという観点から選ばれているケースが多かった。その一方で，最も単純化された絵である④も支持を得ている点は面白い。

生徒の文章からは，次のような読み取りが見られた。

男が裸足である②④の絵からは，先を急ぐ男の懸命な思いや身分の違いを読み取っている。

・素足で服装が庶民の感じで，男と女の身分の差が表されていると思う。
・履き物がなく，裸足であることから相当急いで盗み出してきたと感じられます。
・②と④は素足なので必死さが表れていると思いました。やっぱり，逃げているところなので素足の方が必死で，本文にふさわしいと思いました。

視線を交わしていない③④の絵からは，先を急ぐ男の焦りを読み取っている様子が見られた。

・暗い夜に，手にいれることが難しい身分の女を連れ出す。嬉しい気持ちの反面，女の身内の人たちに追っかけられるんじゃないかという焦りが，よく表れていると思う。足の幅も大きく開いていることで，走っている様子，急いでいる様子がわかる。また，進行方向でなく，後ろを見ていることから，誰かが追いついてくるのではないかが不安で，警戒している様子が読み取れる。

二人が見つめ合う①の絵はその後に起こる悲劇をより強調させていると読み取る生徒も見られた。

・①番の絵は男女が互いに見つめ合っています。そこから私は二人の想いを感じます。二人は親戚に結婚を反対されて，どうしようもなく男は盗み出したのかなぁと思う。二人は本当はこの絵のようにお互いに通じ合っていて愛しあっていたはず。本文には「盗み出した」という表現で表されているけれど，それは本当は違う意見で女性も同意していた上で，男が連れて行ったのだと思う。そして，二人の微笑ましい顔から，本当に二人とも通じ合っていて男の人も笑顔でうれしい気持ちになっていたけれども，女の人の兄のせいで女の子が連れていかれて男の人はとても悲しみ，女の人も悲しんだ。それとは裏腹にこの絵は逃げるときに二人やっと願いがかない，幸せそうに逃げていたのに，兄に連れて行かれるという彼らの悲しさが，余計に伝わる絵だと思う。だから私はこの絵を選びました。

４種類の絵を比較するという話合いを通じて，生徒は登場人物の状況や心情を，絵と本文のそれぞれの表現に即して読み味わい，論述を行った。小集団による検討を経て論述に至るという流れは第４時と同じであるが，活動に対する生徒の戸惑いは無くなり，非常に活発に話合いが展開され，古典作品に描かれた世界について，生徒同士が楽しんで語り合っていた。古典作品に描かれた世界について自分自身の言葉で語っていたのである。この点は，授業者にとって非常に満足のいくものであった。生徒からも「特に裸足と沓（くつ）の違いの所が一番討論していた感じがして，楽しくもできた」「４つの絵を見て，この絵にはあって，その絵にはない，と比較することでその時の男と女の様子を具体的にイメージすることができた」「絵を描く人によって絵に違いが出るように，グループで話し合ったときも，自分とは違った視点でみんなが考えをもっていたので，面白かった」といった感想が聞かれた。

４　成果と課題

先に文章の書き方の指導は行っていないと述べたが，話合いの指導についても同様であり，取り立てて指導はしていない。生徒にとって，今回のグループ学習は，高校に入学後，全教科を通じて初めての活動であり，話合いという点では高等学校において一度も指導されたことのない生徒である。実

践１においても，実践２においても小集団による話合いは，生徒が古典世界と向き合うための重要な過程である。生徒が話合いの過程を経て，批評文の作成に到達することができたのは，中学校までの「話すこと・聞くこと」の指導が土台としてしっかり存在していたからこそである。だが，一方「話すこと・聞くこと」の土台が確立していない生徒には，別の手だてを講じる必要があることも明白である。

生徒が自らの力で読みを推進させていく際には既習の力がさまざまな形で現れてくる。的確な見通しをもってその場面を設定することで，高等学校の「活用」の姿が今以上に見られ，新たな生徒の姿を我々は見ることができる。例えば，後段の記述から「泣く女」を読み取り，もう一度前半を読み直したという点において，また，女の見つめる露には目もくれずに裸足で走り行く男の姿を，おそらくはその表情や力強い足の筋肉までも読み取ったという点において，生徒の読解力の高まりを見ることができる。次の生徒Ｃは絵と本文を関係付けて解釈し，男と女の逃避行を間近で見ているかのように想像し，共感をもって「芥川」を味わっている。また，生徒Ｄは「生き方」と「芥川」を関係付け，いかに生きるかという問題に昇華している。

・男はやっとのことで女を盗み出し，そこから少しでも遠ざかろうとするので，ゆっくりと歩くことはせず，全力で走っていたと思います。また，女が露について聞いたのにも関わらず，返事もしないで逃げ続けていたところから，男の必死さがうかがえます。その必死さは男が裸足であったり，着物のすそを曲げているところなど，絵で見てもわかるところがあります。男は誰にもバレないようにこっそり，でも素早く盗んできたのでしょう。その時のことを想像するとドキドキします。（生徒Ｃ）

・和歌以降の本文がないと，女は鬼に食べられて，死んでしまっているので，もうこの世に存在しておらず，男は盗んだことに後悔をし，女との思い出に一生浸ったまま，前に進むことができずに生きていくんだと思います。そして，女の関係者からも非難の声を浴びせられ，一生悪人として生きていくことにもなってしまいます。そんな中で，男は何のために生きているのか分からなくなってしまうでしょう。過去のみで生きていると，今，未来を生きる人に置いていかれ，生きている意味さえ失われてしまいます。しかし，何かのために生きている人は，過去を大切にしながら，今，未来も生きていけるでしょう。この男の場合は女のために生きていて，女がどのような形で「今」に存在しているかがとても重要であるのです。（生徒Ｄ）

「活用」を意識した授業改善の取組は，まだ始めたばかりのものであるが，課題としては次のような点が挙げられる。

・他教科の言語活動を含め，それまでに生徒が身に付けた言語能力を把握して，授業構想を練ること。
・目標に応じた効果的な言語活動を設定し，適した教材を開発すること。
・年間指導計画に無理なく組み込むこと。

５　おわりに

生徒が自分の価値観をぶつけ，自らの言葉で語る授業は，生徒自身の「能動的な学習」となる。その学習効果は高いことを自覚しつつも，なかなか実践に至ることは少ない。今回の実践で扱った内容は，今までの授業であれば授業者である自分が説明し，いくつかの発問応答で終わっていた部分である。しかし，生徒にとってそれでは説明の一つを聞いたに過ぎず，読解力を高めたとは言いがたい。生徒に活動させ，説明の一つに終わらせない過程を組み込むことで，彼らの読む力が鍛えられる。すべての教材に組み込むことは不可能だが，今後も取組を続けていきたい。